

# 淑徳女学校発展にかかわる淑徳婦人会の変遷と実態

米村美奈<sup>\*</sup>

1892年(明治25)に浄土宗尼僧であった輪島聞声<sup>わじまもんじょう</sup>が東京小石川の伝通院(浄土宗寺院)境内に「淑徳女学校」を設立した。開校時点の生徒数は、わずかに5人しかおらず、私塾ともいえる規模であったが大きな経営の危機を乗り越え、学生数を順調に伸ばし次第に名声を高めていった。開校から10年足らずの期間で発展を遂げ、高い名声を得て、明治30年代後半にはさらに大きく発展した。学校の動向は、何度も新聞紙面に取り上げられるほど注目されるようになった。

発展した要因は、いくつか考えられる。ここでは、大きな支えとなった輪島聞声が設立した淑徳婦人会の活動を取り上げる。本稿では、淑徳女学校の隆盛を支え、2回結成された淑徳婦人会の発起人やその活動の変遷をたどるとともに淑徳婦人会の実態を明確にすることを目指した。

キーワード：淑徳女学校、淑徳婦人会、輪島聞声、女子教育

## 1. 研究の目的

### (1) 聞声の教育事業成功の要因

明治の女子教育の先駆者の一人である輪島聞声(1852~1920。以下、聞声とする)が、東京小石川の伝通院(浄土宗寺院)境内に淑徳女学校を設立したのは、今から127年前の1892年(明治25)である。開校時の生徒はわずかに5人であった。私塾ともいえる淑徳女学校は2度の経営危機を乗り越え、次第に名声を高めて創立10周年直前の1903年(明治36)3月、浄土宗会に貯金2,000円を付して寄付を願い出た。浄土宗会は満場一致で申し出を承認し、山下現有管長は聞声の功績をたたえる賞状を送り、淑徳女学校は同年4月25日をもって浄土宗の宗立校となり、直後の5月2日に来賓800余人の出席のもとに盛大な淑徳女学校創立10周年記念祝賀会が開催され、注目を集めた。

どうして開校から10年という短期間に、このような大きな教育事業を成し遂げ得たのである

---

<sup>\*</sup> 淑徳大学大学院総合福祉研究科 総合福祉学部教授

うか。成功の要因として以下の4点が挙げられる。

- 1) 創立者・聞声が、卓越した先見性と志を貫き通す不屈の精神にあふれていたこと。
- 2) 義務教育の普及など、国の教育制度が整備され、女子教育の気運が高まったこと。
- 3) 聞声の志操の高さに加え、<sup>そっせんすいはん</sup>率先垂範の姿勢と徳育重視の教育方針が支持されたこと。特に当時の日本を代表する多数の名流婦人の支持を得たこと。
- 4) 上記3)の「当時の日本を代表する多数の名流婦人の支持」といえる淑徳婦人会の設立並びに支援活動があったこと。

## (2) 淑徳婦人会に関する従来定説

芹川(1991:120)は淑徳婦人会設立の端緒と活動内容を、「1893年(明治26)3月、聞声尼は淑徳婦人会を結成されました。この会は毎月例会を学校内に開き、名流婦人が集まり、生徒全員と『阿弥陀経』の訓読をして、名士の講演を聴くことを慣しとしていました。たとえば、明治26年4月3日には、淑徳女学校内で講話会を開き、内藤恥叟氏は『勅語衍義並に竹取物語』の講話を、堀内静宇氏は『婦人家庭の心得』についての演説がありました」と記し、さらに淑徳婦人会の盛り上がり、淑徳女学校の隆盛につながった点を「淑徳婦人会は、春秋二回、植物園などを会場に大会が開かれたので、日ごとに盛会となり、当時の知識階層の婦人団体の白眉となりました。夏目漱石の『わが輩は猫である』のなかにも、その会の名が出るようになり、淑徳婦人会の成功が、淑徳女学校の隆盛に道を拓くことにもなったのです」と述べている。芹川に代表されるこの解説内容は、数ある淑徳学校史の中で最も古い1942年(昭和17)出版の広瀬了義編『淑徳五十年史』をはじめとして、今日まで広く定説化しているものである<sup>1)</sup>。

さらに広瀬が淑徳婦人会設立時の経緯を、「輪島聞声尼は学校発展の一策として淑徳婦人会を明治26年3月に結成された。これは尼の理想を基礎とした一種の修養会」であったと述べ、発起人について「佐藤男爵夫人静子、岩佐男爵夫人とく子、大倉男爵夫人夏子、三宅博士夫人藤子、三浦博士夫人とめ子、伊沢修二氏夫人千勢子、小野金六氏夫人よし子、安田善次郎氏夫人ふさ子、河野広中氏夫人関子、原亮三郎氏夫人礼子、家寿多貞子、中山幸子、前田とみ子、堀江初子、西邑初子、藤田きく子、須田静子女史等が尽力され、会長には岩倉子爵夫人梭子刀自を頂き」(広瀬 1942:47)と記したことも、長い間の定説となってきた。そのために以降の先行研究では佐藤静子以下17名の名流婦人の名を列記し、会長に岩倉子爵夫人梭子<sup>おきこ</sup>の名前を表記している例が多い<sup>2)</sup>。筆者も前著『随想 輪島聞声尼』では上記の定説を一部踏襲した<sup>3)</sup>。

## (3) 定説への疑問点

しかし、前著執筆時に筆者は解消できぬままの幾つかの疑問を抱いた。たとえば第1に、「開校時5名の小規模な学校、しかも3年就業の学則で、まだ1回も卒業生が出ていない、実績の

ない学校の開校半年後に、どのようにして淑徳婦人会を結成できたのであろうか」、第2に「結成当初から春秋2回の大会が植物園などを会場にして開催され、多数の人を集めたのだろうか」、第3に「本当に当時の日本を代表する佐藤男爵夫人静子、岩佐男爵夫人とく子など17名もの名流婦人が発起人となったのだろうか」という疑問である。

一方で、聞声の生涯についての論究を進めると、明治40年代の新聞などに会長・岩倉子爵夫人梭子のもとに、小石川植物園を会場に盛大な淑徳婦人会春季大会が開催された報道があり<sup>4)</sup>、文豪・夏目漱石の小説『わが輩は猫である』に淑徳婦人会の名が登場するのも事実である。この疑問と動かしがたい事実との間に、どのような事情が秘められているのだろうか。訂正すべきはどのような点であろうか、などの問いが生まれてきた。

そのうち、淑徳婦人会の活動と同じ時代の出来事を記録する史料「浄土教報」<sup>5)</sup>や安藤鉄腸著『教会の婦人』によって、明治の仏教界・教育界を代表する名流婦人たちの活躍やその興味深い人物像、そして仏教系各種婦人会の結成の由来や変遷とともに、淑徳婦人会の活動を学ぶことができた。その考察の一端を前著『輪島聞声の生涯』に記した<sup>6)</sup>。

聞声は1912年(明治45)5月に、創設以来20年におよぶ監督職を辞任することを表明し、淑徳婦人会は聞声の辞任決意を受けて同年11月に解散を決議した。本稿は、「浄土教報」を中心に『教会の婦人』などの同時代史料を援用して、淑徳女学校の隆盛に大きく寄与した淑徳婦人会の設立から解散までの20年におよぶ軌跡と変遷の実像を明らかにしようとするものである。なお、資(史)料の引用に際し、旧字体を新字体に改め、適宜句読点を加え、ルビの一部を省略した。

## 2. 淑徳婦人会結成

### (1) 「淑徳女学校設立趣意書」と淑徳女学校開校

明治の仏教教育について、斎藤(1975:48)は「仏教の場合は普通教育より僧侶教育に、力点をおき、又、男子中心性社会を強く反映し、男子教育に主力をおいている」としている。このように当時の仏教各宗における教育は、第1に僧侶を育成することを目指す僧侶・尼僧教育と、第2に仏教の教えを基盤として一般人を教育する一般教育に大別される。聞声は結果的にその両者の設立を志し、推進し、その先駆者の役割を果たしたのである。

すなわち、尼僧に対する教育の必要性を痛感して浄土宗尼衆教場(浄土宗学京都支校附属尼衆教場)を1888年(明治21)2月に京都知恩院内に設立した。第1の僧侶・尼僧教育の実践である。しかし悲願の浄土宗尼衆教場が実現した喜びにつつまれた同年12月、荒廃した東京本所・感応寺を再建するため、宗門から第15世住職に任命された。聞声は浄土宗尼衆教場を姉弟子・貞音に託し、尼僧教育の場を離れて上京しなければならなかった。

東京に居を移した聞声は1889年(明治22)、東京芝の増上寺山内の学頭寮に東京尼衆教場が

開設されると、監督兼教授に任命された。さらに女子教育を要請する世論や浄土宗内の声に応え、1891年（明治24）9月に一般女子教育を目的とする淑徳女学校設立趣意書（以下、設立趣意書とする）を浄土宗学監に提出し、翌年に淑徳女学校を設立した。ここに第2の一般（女子）教育の重い扉を自ら開き、聞声の苦難に満ちた女子教育者としての実践が開始されたのである。

設立趣意書を現代語訳すれば、「およそ（女子生徒の）、徳性（道德心）を育てるには、自分で率先して模範を示し、そののちに導くのでなければ、良い成果を得られない（道理である）。現在、女学校と称するものが多数設立されている。その（教育）目的は、皆、淑徳をかかげているが往々にして目的と反対の教育結果が多いのはどうしてであろうか。思うに理由がないわけではない。そのなかでも特に、（キリスト教などの）異教者による教育（の内容、教科など）を見ると（伝統的な日本古来の仏教や儒教や神道などの教えと対比したとき、異教なものを感じ）嫌悪さえ感じる」となり、聞声は徳性（道德心）の育成の必要性を強調し、先行するキリスト教教育に対する反対の立場を示している。

設立趣意書は、さらに続けて、「一方（このごろ）、仏教徒の立場で女子を教育しようとする人の話を聞かない。嘆かわしい限りである。この点にこそ、私が本校（淑徳女学校）を設立し、女子の淑徳の徳性を養成して、立派な教育の効果をあげたいと願うものである。このような理由から本校では（女子生徒の模範となる）徳を身につけた教員を招き、さらに教科書および学校運営の方法を充分吟味して、（女子生徒たちの）静淑の徳（道德心）を養成する上で問題が起きないように努力する（覚悟である）。もし、これを機会に好結果を得ることができたならば、わが浄土宗が日本国家のために尽くす（証の）一つとなるはずである。ここに朝野（浄土宗門と世間）の賛成と援助をお願いするに当たり、謹んで私の真意を述べた次第である」と記している。

設立趣意書の核心部分は尼衆教育の立場から一步踏みだし、一般の女子に静淑の徳を教育しようとするものである。加えて指導者に徳のある行動を身につけた教員を招きとしている点など、特筆すべき点である。その背景には、近代的な学校制度が確立し、教科書が同一となり、義務教育としてどこの学校へ行っても同一の教育が受けられるようになったことが挙げられる。すなわち、同一の教授法が目指されると、教育の方法と道具が同じでもそれを誰がどのように教授するのかが反対に問われることになる。こうした背景から、聞声自身はもちろんのこと、徳のある行動を身につけた教員を招き、教員が身をもって教授する必要があることを強調し、教育の質を大切にしたのである。この点が教育事業成功要因としての3)にあげた「聞声の志操の高さに加え、率先垂範の姿勢と徳育重視の教育方針が支持され、特に当時の日本を代表する多数の名流婦人の支持を得た」と考えられるところである。

聞声が設立趣意書を提出したのち、「浄土教報」（第99号、明治25.2.15）の社説では「女子教化の急要を論ず」と題し、浄土真宗などですでに開始されている女子教育を、浄土宗でも開始する必要性を主張している。こうした状況下で設立趣意書は許可されたのである。「浄土教報」に

は開校までの歩みが、

- 1) 「輪島聞声尼の計画 東京尼衆教場の教頭輪島聞声尼は兼て女学振起の志願ありしが、いよいよ地を小石川伝通院境内に卜し」との建設予定地の決定（「浄土教報」第101号、明治25.3.5）
- 2) 「静淑女学校創立並建築緒言（以下、建築緒言とする）」の発表（「浄土教報」第106号、明治25.4.25）
- 3) 「建築も立派に落成せし」と校舎の完成報告（「浄土教報」第111号、明治25.6.15）

などの関連記事が次々に掲載された。そして聞声は、茅根学順や野沢俊岡などの協力と、感応寺の信徒総代・水島忠兵衛の校舎購入資金の援助を得て、淑徳女学校を同年（1892、明治25）9月に開校したのである。

## （2）淑徳婦人会設立

開校時の入学生は前述したように5名であった。しかも『淑徳五十年史』が新入生について「生徒は（東京）尼衆教場と共に移ってきた3人の尼僧と河野たか、平岡いねの両女史であった」（広瀬 1942:6）と記録しているように、5名のうち3名は東京尼衆教場から転校した尼僧であり、実質的な新入生は2名のみであった。一方、教師は内藤恥叟校長、和久正辰教頭、監督・聞声のほかには講師4名の計7名であり、生徒より教師の方が多いスタートである。学科は、正科（3年制）と別科（2年制）の2科で構成され、読書、算術、手芸、修身、図画、生花、点茶等の教科が教授された。

聞声は9月7日に開校始業の祝い会を開き、教育者として名高い杉浦重剛など多数の来賓の祝福と激励を受けた。こうして出発した淑徳女学校であったが、3ヵ月後の12月末に第1回目の資金難に陥り、困惑した聞声は病氣と称して家で寝ていた。その窮地を救ったのは義弟の岩田栄蔵の「薬代200円」のお見舞いであった。当時岩田栄蔵は、聞声の生誕地・松前で船運会社「松前運送会社」（北海道松前）の社長に就任しており、商用で上京した際に聞声を訪ねたのである。聞声は12月末の資金難を無事に乗り切ると、1月2日付「読売新聞」に生徒募集の広告を出した。1月5日の「浄土教報」には「淑徳女学校は創立日尚ほ浅きも、評聞尤も宜しく、入校生も追々増加する由にて」と、学校の評判が良好との記事が掲載され、併せて同校の評議員の名前が、「荻原雲台、金子常全、河瀬秀治、竹田典栄、伊達靈堅、桑田衡平、朝日琇宏、三星善応、三浦省軒、広安信随、渡辺辰五郎、久保了寛」と明記されている。

評議員の多くは当時の浄土宗の重職である。聞声の女子教育への取り組みを浄土宗門の首脳陣がいかに期待していたかの現れと指摘できよう。その視点に立つと、聞声が4月に発表した建築緒言の末尾に、「女学校の設立が成功したならば、浄土宗の公有の校舎とする考えである」（現代語訳）と決意を表記したことと呼応するものであることに気づく。

聞声は第1回目の経営危機を乗り越えたあと、今後の学校経営を考え、婦人団体の設立を思い立つ。当時は名流婦人たちの呼びかけによって啓発や修養、社会奉仕などさまざまな性格の婦人会が活動していた。教育者・石井筆子や棚橋<sup>あやこ</sup>絢子らによる大日本婦人教育会、下田歌子らによる帝国婦人会、社会運動家・奥村五百子らによる愛国婦人会などである。聞声が目指したのはこれらの団体と性格を異にし、あくまでも聞声の女子教育の理想を基礎とした仏教主義的修養会であった。

晩年の聞声から聞き書きをした谷紀三郎は、「内で節儉質素を守って、いかに冗費を省くことに努めようとも、そればかりでは、到底思はしい結果を見ることは出来ない。どうしても外にも何か有力な後援を得なければ駄目だ、かう思つて何か一の婦人団体を作らうといふ考を抱いた。そして創立したものが淑徳婦人会であった」(谷 1920:114)と、聞声の心境を記している。こうして同年(1893, 明治26)3月に淑徳婦人会が開設され、同じく3月に浄土宗宗議会は淑徳女学校に対して翌年4月より年間300円の援助を実施することを可決した。こうした状況のもとに淑徳婦人会の最初の講話会が開催されたのが4月3日である。

### (3) 淑徳婦人会の発起人と初期の入学者

淑徳婦人会の設立と最初の講話会の内容や、会の規則、発起人などの詳細が「浄土教報」(第141号。明治26.4.15)に大きく報じられている。講話会については、「3日には、淑徳女学校内に講話会を開き、内藤恥叟氏勅語衍義並に竹取物語の講話、堀内静宇氏婦人家庭の心得を演説せり」と記されている。この記事内容は先述の芹川(1991:120)と同一である。したがって、筆者が抱いた疑問のうち、第1の「開校時5名の小規模な学校、しかも3年就業の学則で、まだ1回も卒業生が出ていない、実績のない学校の開校半年後に、どのようにして淑徳婦人会を結成できたのであろうか」については、開設の由来と事実が確認できたことになる。

次に、第2の疑問の「結成当初から春秋2回の大会が植物園などを会場にして開催され、多数の人を集めたのだろうか」について、淑徳婦人会の規約を見てみると、「第3条 本会は前条の目的を達せん為め、毎月3日教筵を開き、法話演説等を為す事」が定められている。しかし春秋の大会についての規約は記されていないので、不明のままである。

第3の疑問の「本当に当時を代表する佐藤男爵夫人静子、岩佐男爵夫人とく子など17名もの名流婦人が発起人となったのだろうか」については、発起人の名を「桑田てい子、河瀬てる子、河野せき子、家寿多てい子、三浦とめ子、井上すて子、亀岡幸子」の7名としているので、明らかに異なっている。このなかで河野せき子(関子)は政治家・河野広中の夫人である。桑田てい子、河瀬てる子、三浦とめ子の3名は評議員に名を連ねた桑田衡平、河瀬秀治、三浦省軒の各夫人と想像されるが、家寿多てい子、亀岡幸子とともに発起人に就任した経緯など詳細は定かではない。しかし少なくとも広瀬(1942:47)に代表されるこれまでの定説の「佐藤男爵夫人静子、

岩佐男爵夫人とく子」などの名前は見当たらない。

淑徳婦人会の設立が報じられた「浄土教報」の次号に、河野広中・関子夫妻の仏教への篤信<sup>とくしん</sup>ぶりと、淑徳婦人会や淑徳女学校との関係を示す記事が掲載されている。「自由党の領袖たる代議士河野広中氏には、平生仏教を尊信せられ、毎朝必らず般若心経を讀誦<sup>けんたい</sup>して懈怠あることなしと云ふ、又、其令夫人てい子（筆者注、てい子は関子の誤り）には厚く仏教に帰依し、淑徳婦人会を發起し、其令嬢たか子を淑徳女学校へ入学せしめ、仏教の徳義を以て養成せんとの心懸けなるよし」（「浄土教報」第142号。明治26.4.25）。

この紹介記事を見ると、河野関子が淑徳婦人会の発起人の一人となり、令嬢たか子を淑徳女学校に入学させたいきさつが想像できる。そして開校時の5人のうちの「河野たか子」が実は河野広中・関子の娘であったことも判明する。同時代史料『教会の婦人』の著者・安藤鉄腸によれば、河野関子は福島県の代々続く仏教信者の家に生まれ、若くして姉妹で剃髮して尼僧となり、憲政党政務委員・河野広中が自由民権運動のために福島監獄に入獄していた折に、その人柄に触れ、のちに還俗して河野広中に嫁いだという（安藤 1903:33～35）。

また、淑徳女学校の初期の入学者の中に、もう一人の著名人の子弟の名が記録されている。それは教育者・伊沢修二の孫娘であり、「伊沢氏の総領のお嬢様（後の遠藤隆吉氏令室）は、初期の生徒であった」（広瀬 1942:6）というものである。開校間もない淑徳女学校に、政治家・河野広中夫妻の娘と教育者・伊沢修二の孫娘が入学していたことは、大きな意味をもっていると考えられる。いずれも創立者である聞声への高い評価と、格調高い設立趣意書への信頼に基づくものと思われるからである。

徳武真有は、伊沢修二の教育論と行政手腕、そして聞声や設立趣意書の文言について、「（筆者注 聞声）先生の教育方針と人格とに、絶大な敬意と賛意と協力とをささげたのは明治教育界の先達、教育の理論的研究の先達者といわれた伊沢修二氏である。（略）その名著『教育学』（1882）と『学校管理法』（同上）とは、本邦における最初の教育学の学術的研究書である」と紹介し、さらに続けて、伊沢修二の文部省編集局長としての活躍と、淑徳女学校設立趣意書への協力について、「その実際面においては、明治19年、文部省編集局長として教科書編集の任に当たられた。本校設立趣意書の『教科書及び管理方法の如き充分の吟味を尽し、静淑の徳を養成するに於て欠くる所なきを期す』という誇り高き文章は、健やかな本校の教育方針を示す一節であるが、そのかげには伊沢氏の協力をしのばせるものがある」（徳武 1962:16）と示唆に富む見解を記している。伊沢修二はのちに淑徳婦人会が淑徳女学校内に開設した女子清韓語学講習所の顧問として活躍し、夫人千勢子も淑徳婦人会の会長代理をつとめるなど、聞声および淑徳婦人会にとって重要な役割を担っていくのである。

#### (4) 淑徳婦人会の活動と学校身売りの危機

「浄土教報」を閲読すると、同年（1893、明治26）の淑徳婦人会の月例会を報じる記事は、

- 1) 5月3日 神水、久保両氏の説教、杉山泰成氏の演説、空也念仏、和讃、弹琴。（「浄土教報」第144号、明治26.5.15）
- 2) 6月3日 伊藤、外山両氏の演説、大鹿愍成師の五戒の法話、放生会。（「浄土教報」第147号、明治26.6.15）
- 3) 7月3日 堀内静宇、宮沢説音、大内青巒三氏の講話。会員婦人百有余名来会。（「浄土教報」第149号、明治26.7.5）
- 4) 10月3日 堀内氏演説、高瀬順達師の法話、音曲、来会者数多。（「浄土教報」第158号、明治26.10.5）
- 5) 11月3日（予告）高津相樹、加藤咄堂両氏の演説予定。（「浄土教報」第160号、明治26.10.25）

などが見られる。毎月の例会が順調に開催されたことがわかる。ここで気になる点が2つある。第1は、いずれの記事にも淑徳婦人会の会長名が明記されていないことである。第2は、翌1894年（明治27）3月5日に「1周年総会」が開催されたことが、「浄土教報」（第173号、明治27.3.5）に報道された後、1899年（明治32）11月25日発行の第379号まで、「淑徳婦人会」に関連する記事の掲載が見いだせないことである。

一方この間にあって、聞声の淑徳女学校は評価を高め、1895年（明治28）に第1回卒業生を出すなど順調に推移している。しかし好事魔多し<sup>こうじまおほ</sup>の言葉のように、1897年（明治30）に2度目の経営危機に見舞われた。同年に浄土宗からの援助が年間400円に増額されたが、それでも財政は極度に悪化し、学校の身売り話がなされるほどの深刻な窮状に直面したのである。もしも従来の定説のように、1893年（明治26）3月の結成当初から多数の名流夫人が淑徳婦人会を支援し、この時点で活発に活動していたのであれば、淑徳婦人会によって何らかの支援策が検討され、実行されたであろうと考えられる。しかし困窮した聞声に救いの手を差し伸べたのは、淑徳女学校の開校のときに校舎購入資金の援助を引き受けてくれた感応寺の信徒総代・水島忠兵衛であった。淑徳婦人会が救いの手をのべた記録は見当たらない。

### 3. 名流夫人の本格的参加

#### (1) 寄宿舎新設と黒田真洞の第4代名誉校長就任

水島忠兵衛の支援によって危機を脱した淑徳女学校は次第に隆盛となり、1899年（明治32）4月には「本年は新入学の女生非常に多く、既に本月上旬まで七十名に近き入学者あり」（「浄土教報」第357号、明治32.4.15）というまでに発展した。そして寄宿舎が新設されたのである。「浄

土教報」第363号(明治32.6.15)ではその様子を、「淑徳女学校は成績佳良なるが為に、地方の豪族良家の女子にして、寄宿入学を希望するもの多く、到底従来の寄宿舎にては狭隘<sup>きょうあい</sup>を訴ふるより、今回全校裏手の空地に一棟の寄宿舎を設立することになりたり」と紹介している。

新しい寄宿舎は7月に完成し、8月3日に私立学校を対象とする最初の法令「私立学校令」が公布された。この私立学校令によって私学の存在が日本の近代教育のなかで正当なものに位置付けられたわけであるが、直接・間接的に国家の教育政策の統制を受けることになったことも指摘できる。そして私立学校令に基づき、学校としての基盤整備が求められ、地方長官の監督に属するため、設置・廃止や設立者の変更を監督庁に申し出ることと定められた。もちろん淑徳女学校も例外ではない。

この私立学校令の公布ののち、淑徳女学校では大きな人事の交代が行われた。2ヵ月後の10月に黒田真洞が淑徳女学校の第4代名誉校長に就任したのである。黒田真洞は聞声が浄土宗総本山宗学校に学んだときの師であり、その意味では聞声と旧知の間柄であるが、当時の黒田真洞はそののち浄土宗を代表する学者として名声を築き、さらに1899年(明治30)に浄土宗最高の役職・執綱に就任していた。服部英淳はこの間のいきさつを、「明治32年8月、私立学校令が公布されたので、淑徳も之に応ずる必要から、京都以来の因縁によって黒田執綱を名誉校長にお願し、宗門の援助を期待されたようです」(服部 1957:11)と解説している。まさに私立学校令の公布とその対応に合わせたかのような名誉校長への就任である。

あるいは寄宿舎の新築などの私立女学校としての体制整備も、私立学校令の公布に備えての動きだったとも考えられよう。こうした新しい気運が盛り上がる中で、黒田真洞が名誉校長に就任した翌月、11月15日に河野広中夫人などが出席して淑徳婦人会の組織変更の相談会が開かれた。郁吉随円の「淑徳婦人会の将来に対する希望」の講話があり、発起人や規則その他が熟議され、新たな発起人と会則が「浄土教報」第379号(明治32.11.25)に大きく報道された。

## (2) 名流夫人による淑徳婦人会の再結成

「浄土教報」第379号の記事をまとめると、以下の5つの特長が挙げられる。

まず第1の特長は、「貞順静淑は婦人の美德なり」で始まり「茲<sup>こゝ</sup>に淑徳婦人会といふものを組織し、仏教の妙理を皇国固有の徳義に調和して、広く婦徳を成就し、女風を振起せむとす、愛国御法に熱心なる君子淑女来りて、此の会を贊助し婦人将来の幸福を増進せしめ給はむことを切望す」と締めくくる「淑徳婦人会主旨」が新たに宣言されている点である。1893年(明治26)4月の淑徳婦人会発足時の「淑徳婦人会緒言並規則」と比較すると、「皇国固有の徳義」や「愛国御法に熱心なる君子淑女来りて」などの表現が特徴的である。その背景には、淑徳女学校の開校半年後に淑徳婦人会が発足し、翌年の1894年(明治27)8月1日に、日本が清国に宣戦布告して「日清戦争」に勝利したものの、日本の大陸進出を阻止しようとするロシア・フランス・ドイ

ツによって、1895年(明治28)に日本が獲得した遼東半島<sup>りょうとう</sup>を返還する三国干渉を受け、日本国内に一気に護国・愛国の世論が沸騰したことが考えられる。

第2の特長は、会の主唱者として「輪島聞声」の名前が明記されたことである。

第3の特長は、発起人に「伊沢千世子、岩佐徳子、原礼子、西村節子、西尾良子、細川糸子、堀江貞子、河野関子、河瀬てる子、亀岡幸子、永井文子、井上捨子、家寿多貞子、小崎常子、丸山勝子、児玉周子、城所高子、三宅藤子、三浦留子、守田市子、鈴木代子、須田静子」の22名が選出されたことである。1893年(明治26)4月の淑徳婦人会発足時の発起人7名のうち、「河瀬てる子、河野せき子(関子)、家寿多てい子(貞子)、三浦とめ子(留子)、井上すて子(捨子)、亀岡幸子」の6名は継続して発起人に名を連ね、その他の16名は新たな発起人である。

ここで区別を明確にするため、1893年(明治26)4月発足の淑徳婦人会を第1期淑徳婦人会、1899年(明治32)12月発足の淑徳婦人会を第2期淑徳婦人会と整理することにす。そして 1) 第1期淑徳婦人会(「浄土教報」第141号)、2) 第2期淑徳婦人会(「浄土教報」第379号)、3) 谷紀三郎(1920)、4) 広瀬了義(1942)、5) 平松誠厚(1957)、6) 徳武真有(1962)の6種の資(史)料に掲載されている発起人名を年代順に一覧表にまとめ、比較してみた(別表1参照)。合計すると、名流夫人とされる発起人は延べ32名にのぼる。

第4の特長は、新たな規則として「第11条 本会は春秋二季に大会を開くを常例とす」と定められた点である。ここで初めて春秋2回の大会の開催が明示されたわけである。

第5の特長は、来月(12月)9日に「盛大な発会式を挙行する予定」との告知である。

以上が、名流夫人による淑徳婦人会の再結成の概略である。そして予告通り12月9日に淑徳女学校講堂において、第2期淑徳婦人会の発会式が盛大に挙行された。「浄土教報」第381号(明治32.12.15)に、「当日正門には大国旗を交叉し、玄関に藤紫染出の幔幕を張り廻はし(略)参会の黒田執綱、導師として読経をなし、天下和順の経文を誦し(略)参列者は大約三百五十余名なりき」など、その詳細が報道されている。

### (3) 著名文化人を招いての淑徳婦人会

第2期淑徳婦人会の発会式の2ヵ月後、1900年(明治33)2月10日の例会では大内青巒の「淑徳」と題する講演があり、筆記録が「浄土教報」第387号(明治33.2.15)の紙面3頁に記載されている。4月8日の釈尊聖誕祭を兼ねた例会では下田歌子や黒田真洞など多数の講師が講演・法話を行っている。なかでも下田歌子は「宗教家に淑徳無きことあり、往々廢倫の徒を出す、学者の家に腐敗の醜名を生ず(略)之れを要するに智が徳の奴とならざるより起るものなり、智にして徳に伴はざらんか、智は偶々以て悪人たるに過ぎず、希くは諸君よ、聞て之れを實踐せよ」と、淑徳の實踐を高らかに述べ、筆記録が「浄土教報」第393号(明治33.4.15)に掲載されている。こうして名流夫人によって再結成された第2期淑徳婦人会は、著名文化人を講師に招いての講演

会活動を活発化していく。

10月6日開催の例会では、釈宗演禪師、河瀬秀治、高瀬順達が講演・法話し、会員150名が参集している（『浄土教報』第412号、明治33.10.25）。演者の釈宗演禪師は、1893年（明治26）にシカゴで開かれた万国宗教大会に日本代表の一人として参加し、大会での禪の講演が絶賛され、世界的な名声を得ていた。また、この万国宗教大会の会場で配布され、好評を博したのが黒田真洞著『大乘仏教大意』の英訳本であった。おそらく釈宗演禪師の講演も、当時の黒田真洞名誉校長との縁によるものと推測できる。

翌年（1901、明治34）2月2日の例会では北野玄峰老師、三宅秀博士、奥村五百子など著名人の講演があり、4月16日には淑徳婦人会の春季大会が伝通院の大殿で開催された。当日は雨天にもかかわらず、会員300余名が参集したという（『浄土教報』第431号、明治34.4.21）。これまでに筆者が見いだした淑徳婦人会の春秋大会の記録は、見逃している記録が存在するのかもしれないが、この1901年（明治34）4月の春季大会が最初である。

ここで留意したいのは、名流夫人による淑徳婦人会の再結成以来、この「春季大会」の記録に至るまで会長の名前が見当たらないことである。すなわち、先に見た広瀬了義（1942）、平松誠厚（1957）、徳武真有（1962）などの資（史）料で、「会長には岩倉子爵夫人梭子が就任し」とされているにもかかわらず、岩倉梭子の名が登場しないことへの疑問である。なぜならば第2期淑徳婦人会が結成されたのちの、明治30年代半ばから解散（1912年、明治45）までの、約15年間にわたる淑徳婦人会の目覚ましい活動の記録には必ずと言っていいほど、会長岩倉子爵夫人梭子の名前があり、岩倉梭子が果たした役割の大きさと影響力を抜きにして、その後の淑徳婦人会の華々しい歴史を語ることはできないからである。では、岩倉梭子はいつ淑徳婦人会の会長に就任したのであろうか。

#### （4）岩倉梭子の会長就任時期

岩倉梭子と淑徳婦人会の関係を考察するうえで、重要な同時代資（史）料の一つが安藤鉄腸著『教会の婦人』である。同書は、棚橋詢子（女子教育家）や奥村五百子（社会運動家。愛国婦人会の創設者）を筆頭に、聞声や跡見花蹊（教育者、跡見学園の創設者）など当時の仏教界・教育会を代表する婦人35名の評伝集である。著者の安藤鉄腸は巻末資料に「やま仏教文士にして有名な日本新聞記者」と紹介されており、本文は明治後期の東京の有力新聞の一つ「日出国新聞」に連載されたのち、加筆増補されて出版されたものである<sup>7)</sup>。

安藤鉄腸は岩倉梭子が代表をつとめた浅草婦人会と淑徳婦人会の歴史にふれながら、両会と岩倉梭子の関係を以下のように記している。

東京の婦人会のなかで最も古い歴史を持ち、最も隆盛なのが浅草本願寺で開かれている浅草婦人会であり、数多い婦人会のなかで多くの妙齡の女子を会員に持ち、女学生の婦徳を涵養するこ

とに努力していたのが淑徳婦人会である。浅草婦人会は1886年(明治19)の秋に真宗大谷派本山の助力をもとに設立され、17年間にわたり毎月開かれ、当初は貴婦人法話会と称して主に華族・紳商の婦人などで組織されていた。一昨年より一般の中流社会の婦人も加入するようになり、現在300名ほどの会員がおり、原礼子、中山幸子、岩佐徳子、野田操らが幹事として尽力している。一方、淑徳婦人会は1893年(明治26)に、浄土宗にこの人ありと知られた輪島聞声などが起こした会で、はじめは淑徳女学校の生徒ばかりを会員としたが、のちに次第に拡張して現在では志ある婦人を加え、西村節子、原礼子および輪島聞声などが主となり、100名余の会員に達している。

岩倉梭子は真宗大谷派の法主・大谷光瑩こうえいの妹で、跡見女学校で教育を受け、若くして岩倉具視公爵の分家である子爵・岩倉具経ともつねに嫁ぎ、4男1女の母親となり、夫の赴任に伴われてロシア公使館に3年いたこともある。1890年(明治23)に夫の岩倉具経が病死したため、以降は子女の薫育に心がけ、温良恭謙な日々を送り、昨年より浅草婦人会の会長となり、一昨年の秋より淑徳婦人会の会長の任についた(安藤 1903:119~123)。

『教会の婦人』が発行されたのは1903年(明治36)であるので、文中の「一昨年の秋」というのは1901年(明治34)秋と考えられ、岩倉梭子の淑徳婦人会会長の就任もまた1901年(明治34)秋と考えるのが至当である。この観点に立てば、1899年(明治32)の名流夫人による第2期淑徳婦人会の再結成以来、1901年(明治34)4月の春季大会まで、会長として岩倉子爵夫人梭子の名前が登場しない疑問が氷解する。

聞声と名流夫人との交流を示すエピソードの一つに、時期は定かではないが「(聞声)尼は(姪の松田)すて子嬢の刺した刺繍を手土産に、これら名流夫人を歴訪されてその声援を仰がれた」(広瀬 1942:47)があり、興味深い。また、聞声は岩倉梭子が会長に就任したと思われる1901年(明治34)に、入院している。壮健であった聞声が50歳(満49歳)を迎え、それまでの無理が災いしたのか、重病に罹り入院を余儀なくされた。そして入院中の病床で淑徳女学校の将来を熟慮し、浄土宗への寄付を決断したのである。退院後に黒田真洞や関係者に決意を伝えると、一部に反対の声が起きたが説得し、浄土宗に願い出て1903年(明治36)4月に浄土宗に寄付している。潔く決断を促した要因は、淑徳女学校の名声の高まりと生徒数の増加に伴う経済的余力が増加していたこと、その背景に第2期淑徳婦人会の再編成、特に岩倉梭子の会長就任が大きな意味をもっていたものと考えられる。

聞声が浄土宗に淑徳女学校を寄付した直後の5月2日に、盛大な創立10周年記念祝賀会が開催されたことは本論文の「研究の目的」で概述した。祝賀会の800人余の来賓を接待するのに尽力したのが淑徳女学校の関係者や淑徳婦人会の会員であり、会を代表して挨拶したのが会長・岩倉子爵夫人梭子である(「浄土教報」第538号、明治36.5.10)。

## 4. 淑徳婦人会の隆盛

### (1) 女子清韓語学講習所を淑徳女学校内に開設

岩倉梭子の会長就任によって、第2期淑徳婦人会の活動はさらに大きく展開した。その象徴が淑徳婦人会の附帯事業として1905年(明治38)に、淑徳女学校内に女子清韓語学講習所を設立したことである。「浄土教報」第636号(明治38.3.27)に、淑徳女学校では近来生徒が増加したため手狭になり、50坪の教場の拡張を伝える記事とともに、「女子清韓語学講習所設立趣意書」や学則、入学願書などが大きく掲載された。

女子清韓語学講習所は清国語や韓国語、教授法など教え、卒業生を教員として中国などに派遣し、女性の社会的地位の向上を図ろうとするものであった。校長に淑徳婦人会の会長・岩倉梭子が就任し、台湾総督府民政局学務部長を務めて帰国した伊沢修二が顧問となり、修身、漢文、清国語、韓国語、音楽、手芸、書法、簿記などの授業が行われた。修業年限は1年4ヵ月であった。この設立の背景には、日清戦争(1894～1895、明治27～28)と日露戦争(1904～1905、明治37～38)後の大陸進出にともない、韓国・中国の女子教育に日本人女子教員が必要という時代状況があった。

加藤恭子は論考「明治末の日本人女子教員中国派遣における淑徳婦人会」で、日露戦争に勝利する1905年(明治38)ごろから中国教育改革が注目され、教員需要拡大により派遣された女子教員の多くが清国派遣女教員養成所と女子清韓語学講習所の卒業生であったとしている(加藤2017:1～14)。清国派遣女教員養成所は下田歌子を中心に結成された東洋婦人会によって設立されたものである。さらに、加藤は同論考で淑徳婦人会や女子清韓語学講習所の役割を論究し、結びとして「淑徳婦人会の先駆的な試みは女子教員派遣の流れを変え、国際的女性運動を日本で連鎖させた一因に位置づけられる」と評価している。

女子清韓語学講習所の第1回卒業式は1906年(明治39)7月19日に行われ、岩倉梭子校長より卒業生山口だい子、片根清子、野村寿恵子、安藤貞子、大塚春子、加藤みよ子の6名に卒業証書が授与された。このとき同講習所の在校生は28名であった。卒業式の様子が「読売新聞」や「浄土教報」(第705号、明治39.7.23)に報じられている。岩倉梭子を始めとする名流婦人が多数集まる淑徳婦人会が設立した清韓語学講習所であるからこそ、注目され新聞に取り上げられたのであろう。こうして第2期淑徳婦人会の活動はさらに隆盛となっていった。

### (2) 夏目漱石の『吾輩は猫である』に登場

第2期淑徳婦人会では毎月の例会を淑徳女学校内で開き、集まった会員と生徒たちが『阿弥陀経』を訓読したあと、名士を招いて講演を聴くのを常例としていた。

文豪・夏目漱石が『吾輩は猫である』の連載を、雑誌『ホトトギス』に始めたのは1905年(明

治 38) 1月からである。『吾輩は猫である』第1章が好評を博し、連載は第11章にまで及んだ。その第10章、すなわち1906年(明治39)4月発行の雑誌『ホトトギス』(第9巻第7号)に淑徳女学校が登場する。漱石自身がモデルとされる作中人物・珍野苦沙弥(主人公の猫「吾輩」の飼い主)と、苦沙弥の姪の雪江との会話に、哲学者・八木独仙先生が淑徳婦人会で講演したことが描写されている。

「だっていいじゃありませんか。あんな風に鷹揚に落ち付いて居れば、——此間学校で演説をなすったわ」

「八木さんが？」

「ええ」

「八木さんは雪江さんの学校の先生なの」

「いいえ、先生じゃないけども、淑徳婦人会のときに招待して演説をして頂いたの」

夏目漱石『吾輩は猫である』(『漱石全集』第1巻 岩波書店 1993年 432頁)

夏目漱石の『吾輩は猫である』に登場したころの淑徳婦人会は、女子清韓語学講習所を開設するなど多岐にわたる活動が注目を集めていた時期である。ベストセラー小説『吾輩は猫である』に描かれたことで、淑徳婦人会の知名度は急速に浸透したものと考えられる。

### (3) 校名の改称と「紫紺に生一本の白線」の袴

淑徳女学校は『吾輩は猫である』に登場した同年(1906, 明治39)12月、文部省(当時)より高等女学校令に基づく認可を受け、翌1907年(明治40)4月の新学期から、校則を改定して修業4年制の高等女学校となり、校名を淑徳高等女学校と改称した。初代校長に淑徳女学校名誉校長・黒田真洞が就任している。また同じ時期に淑徳家政女学校の設置認可届を提出している。このうち学生数が急増し、相次いで校舎を増築するなど、発展の道をたどり、女学校としての名声も一段と高まったのである。そしてそれにともない、聞声は日本女子教育の先駆者という評価を得るまでになっていた。

やがて淑徳高等女学校を象徴するものとして、紫紺色の袴に生一本の白線を描いた制服が有名となる。淑徳女学校のシンボルでもある制服について、大田英隆は1909年(明治42)発行の『学校評判記』で、淑徳高等女学校では、世間の女学生の風儀(行儀作法・風紀)が乱れ、意志が弱く軟弱な生徒が盛んに墮落している様子を大いに憂いて、自校の生徒の袴の裾に一本の白線を入れ、一目見て淑徳高等女学校の生徒であることを世間に知らしめている。これは生徒たちの反省・自戒の念を養うのに最も良い方法で、その効果は見るべきものがあると信じているとしている。このように同校は道徳、宗教、実践に力を注いでいるのが一大特長である、と評している(大

田 1909:29～31)。同書収載の他の学校紹介と比較すると、淑徳高等女学校はかなり高い評価がされていることがわかる。このように外部の評価も高まり、新聞等のメディアにもよく登場し、校名も世間に知られるようになっていった。

#### (4) 小石川植物園での春秋大会

第2期淑徳婦人会では毎月の例会のほかに、春と秋の2回、小石川植物園などを会場に大会を開いていた。この春秋2回の大会は評判を呼び、次第に参加者が増え、当時の知識階層の婦人団体の白眉と称されるまでになり、新聞紙上に大きく取り上げられた。「読売新聞」では1911年(明治44)5月13日の春季大会の盛会ぶりを以下のように報じている。

淑徳婦人会春季大会は小石川表町の淑徳高等女学校の同窓会を兼ねて、一昨日正午より小石川植物園内で開かれた。会長・岩倉子爵母堂梭子は、旅行中にて出席せず。井原主幹がまず開会の辞を述べ、椎尾文学士の「植物園」及び山崎弁栄師の「悲知即満の仏陀」の講演があり、終わって余興に移り、能狂言二番や中国人の奇術があり、会場内よりあふれた生徒等は池を回り樹の間を縫って、赤や紫の袴をひるがえす姿も軽く、木々の緑は濃く茂げり、池畔の燕子花かきつばたは紫の色ゆかしく匂う。来賓には伊沢修二、同夫人千世子、安田善治郎夫人房子、原亮三郎夫人礼子、三浦医学博士夫人とめ子、岩佐男爵夫人千賀子、大倉夏子の諸氏にて、来会者は約500名になる。(現代語訳) (「読売新聞」1911年、明治44.5.15)

この春季大会の様子は「浄土教報」第956号(明治44.5.22)にも掲載されている。そこでは、当日は初夏にもかかわらず暑気はなはだしかったけれども、来会者は極めて多く、婦人会員の伊沢修二・安田善次郎諸氏の令夫人をはじめ、同窓会員校友会員など約600余名に達した。婦人会長代理伊沢夫人の挨拶のあと、校友会員同窓会員の三婦の歌を合唱して、講演に移った、と記されている。

新聞各社によって参会者の数は異なるが、500～600人という大人数の参加者がいたことはまぎれない事実であろう。岩倉梭子会長のもとに第2期淑徳婦人会が最も輝き、世間の注目を集め、影響力を発揮した時期である。まさに、芹川の「淑徳婦人会の成功が、淑徳女学校の隆盛に道を拓くことにもなったのです」(芹川 1991:120)というものであり、聞声の声望とともに淑徳高等女学校が大きく飛躍し不動のものとなった原動力の一つに、第2期淑徳婦人会の活動があったことを雄弁に物語るものである。

## 5. 淑徳婦人会の解散

### (1) 聞声、淑徳高等女学校の監督を退任

第2期淑徳婦人会の活動が大成功をおさめ、淑徳高等女学校の発展と名声が盤石ばんじゃくとなっていっ

た1912年(明治45)、淑徳高等女学校に大きな問題が表面化した。聞声にとって京都遊学のときからの盟友ともいべき黒田真洞校長に気持ちの変化が起き、教育方針や生徒への指導などをめぐり、日ごろから何かと聞声と対立していた井原徳従主幹を助ける側に回り、聞声を抑えるような態度を取り始めたのである。

聞声にとって不快なことであり、黒田真洞校長を自宅に訪ね、その態度変更が理不尽なことを訴えたが、黒田真洞の姿勢は改善されず、聞声対黒田真洞校長・井原徳従主幹という構図となった。そこで紛争解決のために学校の顧問・伊沢修二や、当時の芝中学校校長・渡辺海旭などが調停にのりだしたが不調に終わり、浄土宗宗務所は黒田真洞校長、井原徳従主幹、聞声監督の3人にそれぞれの職を辞するように論告した。3人は後任校長に椎尾弁匡を推すなどいくつかの条件を示し、その約束のもとに辞表を提出した。これで問題は解決の方向に向かったと思われたが浄土宗宗務所が桑門秀我を後任校長に任命したため、ふたたび紛糾したのである。

谷は、晩年の聞声からこのときの心境を聞き書きし、「聞声尼は思った。これはいつまでも自分が(監督の)職に留まるべきではない。時勢が変ってきたのである。自分のような旧思想の者がいつまでも新時代の教育に従事しようというのは間違ったことである」(谷 1920:145)と伝えている。そして黒田真洞校長が退任し、聞声も退任を決意して1912年(明治45)5月、淑徳高等女学校に別れを告げた。

## (2) 盛大な告別式(送別式)並びに淑徳婦人会解散

5月12日午後1時半から東京小石川の伝通院の本堂で、聞声の功績を顕彰する告別式(送別会)が盛大に開催された。当日の様子を「時事新報」や「浄土教報」など新聞各紙は大きく報じている。

「二六新報」は「式場座上の左側には40余名の僧侶、右側には80余名の淑徳婦人会員(が)座を占め、下座には淑徳女学校生徒および卒業生数百名(が)花のごとく居並びたり。開会の読経(が)終わるとともに、聞声尼は壇上に立って一場の挨拶をなせり。同尼は今年61歳の老齢なりと聞けど、…涼しき眼には無言の慈愛を含み」(原文の漢字の一部を平仮名に開く。「二六新報」明治45.5.13)と伝えている。

次に「浄土教報」の紙面を要約すると、淑徳婦人会会長・岩倉梭子を始め、伊沢、岩佐などの理事や会員、同窓会、在校生など500余人が白襟黒紋付の礼服で参列し、読経、開会の辞のあと、聞声は「我れ退くといえども、我が心は永く留まって、この校を護らん」と述べた。参加者一同は突然の退任に驚きながら、その決意の固さと淑徳高等女学校への思いの深さに感動し、涙を禁じえなかったと報じている(「浄土教報」1008号、明治45.5.20)。

このち講師を招いた淑徳婦人会の大会が6月22日に開催され、安田房子、須田静子などの会員、同窓会員、在校生など数百名が参集している(「浄土教報」1014号、明治45.7.1)。そして7月30日、明治天皇が崩御されると元号が大正に改元され、明治の激動の時代に幕が引かれて、

新たな大正時代が始まったのである。

ここで淑徳婦人会もまた大きな転機を迎えた。「中外日報」(1912, 大正 1.12.5)の記事を要約すると、聞声が淑徳高等女学校と全く関係を絶ったことで、伊沢千勢子や三宅藤子などの幹部が対応策を協議し、聞声と関係がなくなった同校内に淑徳婦人会を置く必要はないとの結論に達したので、去月(11月)に会長・岩倉梭子邸に幹部等40~50人が集まり、悲壮な解散式を行った、というものである。

淑徳女学校の創立の翌年の1893年(明治26)に第1期淑徳婦人会が結成され、1899年(明治32)に第2期淑徳婦人会が再結成されて、合計20年にわたり淑徳女学校・淑徳高等女学校の発展に寄与してきた淑徳婦人会が閉会されたのである。聞声自身は退任を表明したあとも、浄土宗管長の要請により顧問の役を引き受け、正式に淑徳高等女学校から離れたのは1913年(大正2)である。

淑徳婦人会の解散式の報道を読むとき、岩倉梭子会長はじめ淑徳婦人会の幹部(発起人など)たちが、いかに深く、聞声その人を信頼し、聞声の教育方針に共感し、聞声に象徴される淑徳高等女学校を支援しようとしていたかがわかる。

一方、わずか5人の生徒の私塾ともいえる状況から、在校生463名(「浄土教報」972号、明治44.9.11)の規模に発展したとき、聞声が「時勢が変ってきたのである。自分のような旧思想の者がいつまでも新時代の教育に従事しようというのは間違ったことである」(谷 1920:145)と述べたように、変革のタイミングであったとも言えよう。事実、淑徳高等女学校はその後さらに名声を上げ、発展を遂げ、聞声を校祖とする淑徳の教えは今日まで脈々と継承されている。

## 6. 考 察

女子教育が一般化される以前にその必要性和先見性から聞声は、淑徳女学校を設立した。すでに他の仏教宗派では、開校している女学校はあったが浄土宗門においては、初めての事業であった。浄土宗は、女子教育の必要性を理解していたものの資金面を含めた全面協力の体制を整えたわけではなかった。たとえ必要性が確かなものであったとしても女子教育が一般化しておらず、現代のような補助金制度もないなかでの設立は、聞声の努力だけでは結実しなかったかもしれない。資金面においては、本文中に記したように幾度も理解者の協力が得られた。また、淑徳婦人会は、資金面のみならず、世間に校名を知らしめ、さらに名流婦人の活動等により教育の質保証を与える結果となった。こうした活動の積み重ねにより、5人からスタートした私塾のような淑徳女学校は、揺るぎない名声を得るまで発展したのであった。聞声の教育論に共鳴した名流婦人による淑徳婦人会は、淑徳女学校の協賛であったといえるであろう。

本稿では、前著『随想 輪島聞声尼』の執筆時に生まれたいくつかの問いを中心に、20年に

別表1 淑徳婦人会発起人名の出典別一覧

氏名	出典							備考
	第1期淑徳婦人会 「浄土教報」第141号	第2期淑徳婦人会 「浄土教報」第379号	谷紀三郎 (1920)	広瀬了義 (1942)	平松誠厚 (1957)	徳武真有 (1962)		
1 桑田てい子	1							
2 河瀬てる子	2	1						
3 河野せき子(関子)	3	2	1	1	1	1	政治家・河野広中夫人	
4 家寿多てい子(貞子)	4	3	2	2	2	2		
5 三浦とめ子(留子)	5	4	3	3			三浦博士夫人	
6 井上すて子(捨子)	6	5						
7 亀岡幸子	7	6						
8 伊沢千世子(千勢子)		7	4	4	3	3	教育者・伊沢修二夫人	
9 岩佐徳子		8	5	5	4	4	岩佐純男爵(宮中顧問官)夫人	
10 原礼子		9	6	6	5	5	原亮三郎(日本銀行理事)夫人	
11 西村節子		10						
12 西尾良子		11						
13 細川糸子		12						
14 堀江貞子		13						
15 永井文子		14						
16 小崎常子		15						
17 丸山勝子		16						
18 児玉周子		17					児玉淳一郎夫人	
19 城所高子		18						
20 三宅藤子(とめ子)		19	7	7	6	6	三宅秀博士夫人	
21 守田市子		20						
22 鈴木代子		21						
23 須田静子		22	8	8		7		
24 佐藤静子			9	9	7	8	佐藤男爵夫人	
25 大倉夏子			10	10	8	9	大倉男爵夫人	
26 小野よし子			11	11		10	小野金六夫人	
27 安田ふさ子			12	12		11	安田善次郎夫人	
28 中山幸子			13	13		12	中山信安(幕末志士)夫人	
29 前田とみ子			14	14		13		
30 堀江初子			15	15		14		
31 西邑初子(西村)			16	16		15	西村虎四郎(三井家理事)夫人	
32 藤田きく子			17	17		16		
合計人数	7	22	17	17	8	16		

わたり淑徳女学校・淑徳高等女学校の隆盛を支えた淑徳婦人会の変遷や実態を論究してきた。その考察をまとめると以下の通りである。

- (1) 淑徳婦人会の結成は、1) 1893年(明治26)4月と、2) 1899年(明治32)12月の2回行われたことがあきらかとなった。本稿では、1899年(明治32)12月以降の記述では区別するため、1)を第1期淑徳婦人会、2)を第2期淑徳婦人会と呼ぶ。
- (2) 第1期淑徳婦人会では7名の発起人がおり、第2期淑徳婦人会の発起人は22名であり、第1期淑徳婦人会の6名が重なる。また先行資(史)料6点に記される発起人32名の関連を別表1にまとめた。
- (3) 淑徳婦人会の月例会、春秋の大会、女子清韓語学講習所の設置、夏目漱石『吾輩は猫である』への登場など、淑徳婦人会を象徴する活動は会長・岩倉梭子を中心とする第2期淑徳婦人会が活躍した時期に重なる。
- (4) 聞声は浄土宗の高僧・福田行誠を導師に得度し、浄土宗の尼僧として学び、浄土宗の尼衆教場を開設し、浄土宗学監宛に淑徳女学校設立趣意書を提出し、一般女子教育の淑徳女学校を開校した。設立当初は聞声、義弟・岩田栄蔵、信徒総代・水島忠兵衛など、聞声をとりまく周囲の協力が主体であったが、浄土宗に寄付したのちの宗立女学校に対し、浄土宗の全面的支援が見られる。この浄土宗立であったことが名流夫人たちの協力度を高めたとも考えられる。設立10年目の浄土宗への寄付が大きな転換点であった。
- (5) 浄土宗への寄付を決断させた契機は、聞声の入院と、同時期の第2期淑徳婦人会の岩倉梭子の会長就任と考えられる。

## 注

- 1) 芹川(1991:120)と同様の解説は、徳武(1962:25)や里見(1981:47)、長谷川仏教文化研究所(2017:70)などに見られる。
- 2) 聞声から聞き書きをした谷(1920:115)や、最も古い淑徳学校史の広瀬(1942:47)などである。また聞声の弟子平松誠厚も『淑徳(創立65周年記念号)』の座談会で大河内隆弘理事長(当時)の質問に対し、「(筆者注 淑徳婦人会は淑徳女学校の)創立の翌年始まりました。発起人には佐藤男夫人・岩佐男夫人・大倉男夫人・三宅博夫人・伊沢修二氏夫人・河野広中文相夫人・原金港堂主夫人・家寿多夫人等で岩倉子爵夫人が会長になりました」(1957:86)と明言している。さらに徳武(1962:25)、浦野(1982:48~49)などにも見られる。
- 3) 筆者は前著(米村 2017:117)では、「発起人は伊沢千世子(教育者伊沢修二夫人)、安田ふさ子(安田財閥安田善治郎夫人)、河野関子(政治家河野広中夫人)など、名流夫人17名が名前を連ね、会長に子爵夫人岩倉梭子女史が就任しました」と記した。
- 4) 「読売新聞」1911年(明治44)5月15日朝刊が、淑徳婦人会の春季大会が小石川植物園で

5月13日に盛大に開催されたことを報じている。その詳細は本稿の「4. 淑徳婦人会の隆盛 (4) 小石川植物園での春秋大会」参照。

- 5) 「浄土教報」は1889年(明治22年)から1944年(昭和19)まで55年間にわたり、浄土教報社より刊行された逐次刊行物である。浄土宗全般の動向を中心に、当時の世相や仏教各宗派・宗教界の出来事を克明に記録し、近代日本の社会・宗教そして浄土宗関係の歴史を知るうえでの基本史料である。
- 6) 筆者は前著(米村 2019:209~214, 223~229, 243~258)で淑徳婦人会についての考察を記した。
- 7) 「日出国新聞」は、明治後期の東京の有力新聞の一つ「やまと新聞」が、1900年(明治33)から1904年(明治37)までの期間、「日出国新聞」と改題して発行した新聞名である。「やまと新聞」そのものは1886年(明治19)から1945年(昭和20)まで発行された。

## 文 献

- 安藤鉄腸 1903『教界の婦人』文明堂
- 浦野俊文 1982 浦野俊文編『淑徳九十年誌』淑徳高等学校
- 大田英隆 1919『男女 学校評判記 完』明治教育会
- 加藤恭子 2017「明治末の日本女子教員中国派遣における淑徳婦人会」『お茶の水史学』2017-3
- 斉藤昭俊 1975『近代仏教教育史』国書刊行会
- 里見達人 1981『生者の善知識 輪島聞声尼』淑徳高等学校
- 芹川博通 1991「慈悲の実現と淑徳教育—輪島聞声尼の生涯—」『輪島聞声先生を偲んで』白鷗社
- 谷紀三郎 1920 谷紀三郎編『聞声尼』私家本
- 徳武真有 1962 徳武真有編『淑徳教育七十年』学校法人淑徳学園
- 中西直樹 2000『日本近代の仏教女子教育』法蔵館
- 長谷川仏教文化研究所 2017 長谷川仏教文化研究所編・石上善應監修『おかげの糸』(「淑徳の時間」テキスト)第4版, 長谷川仏教文化研究所
- 服部英淳 1957「謝恩録」『淑徳 創立六十五周年記念号』淑徳学園
- 平松誠厚 1957「回顧座談会」『淑徳 創立六十五周年記念号』淑徳学園
- 広瀬了義 1942 広瀬了義編『淑徳五十年史』淑徳高等女学校
- 同 1962 広瀬了義編『淑徳七十年史』学校法人大乗淑徳学園
- 米村美奈 2017『随想 輪島聞声尼』淑徳中学・高等学校
- 同 2018『図解 輪島聞声尼の生涯』淑徳大学輪島聞声研究会
- 同 2019『輪島聞声の生涯』淑徳選書6 長谷川仏教文化研究所

## The Transition of the Shukutoku Girls' School and the Status of the Shukutoku Women's Society

Mina YONEMURA

Wajima Monjo established the Shukutoku girls' school on the grounds of Denzu-in, Jodo Shu temple in Koishikawa, Tokyo in 1892, the twenty-fifth year of the Meiji Era. In the beginning, the school had just five students.

Though it was a private school, there were numerous business challenges that had to be addressed. However, Wajima Monjo overcame the situation and the number of students steadily increased as the school built a good reputation within the first ten years. The school saw a lot of growth in the latter half of the thirtieth year of the Meiji Era.

Information about the school trend was frequently published in newspapers and this caught the attention of people.

There are several elements that led to the advancement of the school. I will discuss activities of the Shukutoku Women's Society, which was built and supported by Wajima Monjo.

I will also aim to clarify who are the originators of the Shukutoku Women's Society which was formed two times and what are the transition of activities and the current situation of the society.

Keywords: Shukutoku Girls' School, Shukutoku Women's Society, Wajima Monjo, Girls' education